第１回横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議 生活・自立支援・子どもの育ち分科会　会議録	
日　　時	平成28年９月１日（月）15時05分～16時00分
開催場所	関内新井ホール
出席委員	（有識者、支援団体等）（50音順、敬称略） 沖野　真砂美（横浜市主任児童委員協議会　南区代表） 小園　弥生（(公益財団法人）横浜市男女共同参画推進協会 男女共同参画センター横浜南　管理事業課長　） 田邊　裕子（横浜市社会福祉協議会　地域活動部長） 濱田　静江（児童家庭支援センターむつみの木　センター長） 松橋　秀之（社会福祉法人　日本水上学園　園長） 村田　由夫（一般社団法人横浜市私立保育園園長会　会長） 湯澤　直美（立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科　教授） （行政職員）（機構順、敬称略） 米岡　由美恵（港南区こども家庭支援　課長） 高岩　恭子（横浜市東滝頭保育園　園長） 開地　秀明（こども青少年局　三春学園長） 川尻　基晴（こども青少年局　南部児童相談所長）
欠席委員	１名　宮下　慧子（母子生活支援施設カサ・デ・サンタマリア　施設長）
傍聴	１名
議　　題	１　子どもの貧困対策に対する意見交換
決定事項	

＜議事＞

（開会）

（村田委員）子ども食堂ということで、新聞報道などで具体的に調査結果のことが出ていて、いろいろな項目を寄せ集めて並べると、もう少し立体的に見えるのでしょうけれども。

（２）のアイウエオのエの実施の頻度を見ますと、私のイメージではもっと多いと思っていました。１週間に少なくとも１回くらいはあるとか。子ども食堂は、今のところ月１回が多いようですが、もう少し回数を増やしたほうがいいのかなと思います。その背景がわかりましたらご説明いただけますか。

（事務局）子ども食堂は、始まって歴史が浅い状況で、一度始めたものがなくなってしまうことは、子どもにとって悲しいことだと思います。できる限り継続していくために無理のない範囲で、まずは１回目からというところが多いと把握しています。

（田邊委員）回数は、地域住民の方の協力などいろいろな調整があり、１回から始めて、今後ふえていくところだと思います。

社会福祉協議会で把握しているのは、一番早かったのが、３年前くらいの瀬谷区の

取組だったと思います。セカンドハーベスト・ジャパンといって、市場などで余剰の食材があると、その無料の食材を活動につなげている団体があり、そことつながって。ある団地の訴えや、学校の先生のあの団地の子どもたちは朝ご飯食べてこない子が多いという話とか、夏休み明けに子どもが非常にやせて出てくるといった、そのようなところから、区内のＮＰＯの団体と社会福祉協議会と一緒に取り組んだのが、社会福祉協議会の活動の中で一番最初だと思います。

その他、各区社会福祉協議会の取組としては、ご自宅にある食材を社会福祉協議会の中に集め、生活福祉資金などの貸付の受け付けに来られる方々のご家庭にフードドライブしています。少しずつ各区にも取組が広がりながら、ＮＰＯや、地域の活動団体の方々を中心に、最近は子ども食堂も広がってきました。先日、社会福祉協議会の健康福祉総合センターで、子ども食堂を立ち上げたい方々の、ＮＰＯも主催した、そこにうちも出ました。これから活動したい方々が集まり、今後取り組んでいきたいという内容で勉強会を開いていましたので、今後そういったところも広がってくるのかなと思います。ただ、月１回のところも多いので、今後取組の広がりに期待したいと思っています。

（小園委員）質問があるのですが。子ども食堂がメーンの議題になるのは、先ほど説明にあったひとり親家庭児童の生活学習支援モデル事業でモデル実施２カ所とかをもっと拡充していくといったことと関連してのことでしょうか。

（事務局）ひとり親は、別途、後段で意見交換をしたいと思います。今回子ども食堂を取り上げたのは、地域で子どもの貧困対策に資する取組が数多く行われている中で、今後のネットワークの形や下支えの方法などを議論して深めたいと思い、特化させて議題としました。もちろんほかの関係もご意見いただいて構いません。

（沖野委員）昨日、このような話をする会が南区でありました。今子ども食堂ははやりものになっていると。でも、やっているところのお話では、つくって食べさせることで手いっぱいになり、肝心のつながりづくりが難しいという話を聞きました。子ども食堂は、食事だけを与える場所なのだろうか。みんなで食べる喜びも味わってもらいたいけども、基本的に、おなかが普段満ち足りていない子にはとにかくおなかを満たして、その後の時間を有効に使えないか。食後みんなと過ごす時間が大切ではというお話が出ました。子ども食堂、今後いろいろなところで立ち上げるに当たり、次のことを少し考えながら進めていただけたらと思っています。

（小園委員）私も昨日、うちの施設で半ば自発的なネットワーク会議のようなものを、南区の熱心な虐待対応チームの方たちも中心に、いろいろな施設や沖野さんのような方などで今後どうしたらいいか話し合いをしています。私のセンターでも、８月にＮＰＯの方たちと協働で２回ほど子どもの居場所づくりという食事も出すイベントを行いました。濱田さんの児童家庭支援センターからも子どもたちがたくさんみえて、そういう結びつきができてきています。でも、行政主導の取組ではないので、人件費もありません、食材もなんとか皆さんの寄附などを頼っています。困っている子どもたちだけを相手にするものでもない、地域で見守っていく温かい受け皿や、子どもたちや大人たちの関係をつくっていくためには、どこからどうしたらいいか。一方で、困窮している子どもたちもいて、ケースワーカーの方たちが、家庭に迎え

に行ってもその子たちを連れてきたいとおっしゃっているという地域の関係づくりからやっている状況です。うちのセンターでは、助成金を差し上げるシステムがあり、その団体に今年はぜひこの事業を一緒にやりましょうと、いろいろ相談をしてイベントを立ち上げた経緯があります。

（事務局）今さまざまな場所で子ども食堂が始まり、地域の主体性を大切にしつつ、どういった形で進めていくのがいいか、この会で詰めていければと思っています。

（濱田委員）南区が３人もそろいよかったと思います。非常に温かい地域で、貧しい人たちが中心に暮らす地域でもあり、温かい、いろいろな配慮の満ちた人たちが活動している場所でもあると思います。いろいろな人が立場を越え、もう一度子どもたちの居場所づくりや、何が地域で子どもたちのためにできるのかを、かなり大勢で集まりいろいろな話し合いをする場です。子ども食堂だけの提案ではなく、自分たちは何ができるだろうかと。ある方は個人でかわいらしいクッキーをつくることを目的に、その会に参加され、実際につくって、その場で食べて帰っています。ただ、私どものところは養育支援台帳に載っている子どもですので、社会的養護の子どもを多分地域の人は見たことがないと思い、思い切って。食事のデータもたくさんとっていますので、アレルギーの問題、摂取量の問題、いろいろな配慮が必要な子どもたちをどう地域の人と交流させるかが、とても私たちの課題にもなりましたので、生活の場面に近いところで少し社会にデビューさせる場所として、非常に温かくていい場所でした。なので、その日までに全部夏休みの宿題を終わらせることとして、地域の人がご褒美として居場所をつくってくれたと子どもたちに言って、宿題を全部終わらせて、２回とも行かせていただきました。ボランティアさんは、児相の職員や南区のほかの保健師さん、ワーカーだったため、自分のケースの子の元気な成長した、夏休みに真っ黒になってぱくぱくご飯を食べる様子や、楽しんで集団の中で生き生きとした姿を見る機会になって、すごく喜んでいました。だから、おなかいっぱいになれば必ず心も育つ。でも、それだけが目的では長い間かかわっていくことは難しいと思います。でも、このままゆっくりと少しずつ、みんなができることが提供できれば、南区独特の地域の支え合いみたいなものができていくのではないかと思います。ちょっと楽しみにしていてください。

ただ、皆さんのご支援がないと続けることは難しいので。それと、月に１回でも、目的別にあって、近い子は自由に行ければ、それはそれでとても貴重な場所になるかと思います。１カ所が大勢を引き受けるのではなく、子どもの生活場面の近いところで、安心した人間関係がその先にあるような仕掛けをつくっていただきながら、たくさんの方に参画していただけたらありがたいな。子どもは非常に物語ります。そういうとき、ととても行儀もいい、ありがとうも言えます。そういう場所があると、子どもはちゃんと振る舞えるのだと思い、本当にうれしかったです。これからも、ぜひ皆さん、ご協力とご指導を賜りたいと思っております。

（湯澤委員）　今のご報告も興味深く伺いました。調査の結果の一部をご報告いただいて、このような地域の現状を行政がきめ細かに把握するというのを初めて拝見しました。まずは把握するという基礎作業がとても重要なことだと受けとめました。

その上で、子ども食堂をどう位置づけていったらいいのかが、これからまた新しい

動きも出てくるようなのですが、かじ取りをどうしていたらいいのかというところが重要なテーマだと思っています。例えば、子どもにとって居場所、機能があることが重要ですが、地域づくりの一つのツールと考えたときに、かわいそうな子どもということでいくと、みんなが「お食事あげなくちゃ」という地域づくりをするのか、そういう地域でホームレスの方々の炊き出しがふえなくていいのかというような、全体として、大人の貧困は自己責任だけど、子どもは自己責任ではないので提供するといった形の地域になっていくのは、少しゆがんだ社会になってしまうと感じるので、どういう視点で子ども食堂を位置づけていくのかといった共通認識をつくっていくことがすごく重要なのかなと思っています。

できれば、例えば、今たくさん出てきた取組の中で、この地域のこの取組って、やはりこの視点が大事だというようなモデル的なものがありましたら、共有させていただきたいと思います。その中で、社会福祉協議会や行政がどのように連携していくのかというところにすごくポイントがあると思います。それは、全国的な取組の中でのモデル的なものがどういうところにあるのかという話にもなるのかもしれませんが、そのあたりを今後知りたいと思っています。

また、既存の機関がどうかかわるのかということで、新座市などで児童館の方々も取組を始めておられます。児童館というと、食の提供というところで予算がつきにくい側面もあると伺っていますが、児童館の中で新座だと「ほっこりごはん」という感じで取組を始めて、そういう中で子どもたちがつながるようになると、児童館にも日常的に、また困難家庭のお子さんもその児童館の中でフォローアップしていけるようになるという形での取組というようにも受けとめていますので、既にある既存の諸機関がどういう位置づけになっていくのかということもあわせて考えていく検討材料なのかなと思います。

（事務局）さまざまな地域の子ども食堂の自主性は大切にしつつ、横浜の子ども食堂はこういった形で子どものために進めていきたいといった共通認識を意見交換をしてつくっていければと思います。

視察をした子ども食堂では、ボランティアの大学生がいるところでは、大学生と少し話ができたり、学習支援まではやっていませんが、地域の読み聞かせの団体が、食後、子どもに読み聞かせをしていました。豊島区のＷＡＫＵＷＡＫＵネットの栗林さんの話では、支援を要する子どもだけでない、開かれた子どもの居場所をつくることで、地域の方も集まり、いろいろな子どもが集まってくる中で、この子はという子どもを見つけて支援につなぐとか。また、調理のお手伝いをして、地域のかかわっている人が褒めることで、有用感を持て、不登校の小学生が中学校から登校できるようになったとか。場所があることで、お子さんや親子を連れて来ようというような地域の声かけもできるという話もありました。今のムーブメントのようなものをいい形で地域づくり、地域支援につなげていければと考えています。

周知の方法は、少し実施場所とも関係しますが、私が行った、地域ケアプラザでやっていたところは、「地域ケアプラザ便り」みたいなものを毎月発行して、町内会の

回覧での配布、掲示板への掲示と、特に対象を絞っていませんので、かなり周知が行き渡ったと伺いました。
また、食に関するものなので、各区役所の生活衛生課が、子ども食堂を始めるといったときに食の安全に関するところなど助言しています。このあたりも市としてルールを考えていかなくてはいけないと感じています。

（米岡委員）　港南区には2か所のこども食堂があります。こども食堂では家で一人で過ごしていた子供が来てご飯を一緒に食べられたり、地域の人とこども食堂で顔が繋がったりしています。
　先ほど、食事を食べさせるだけになってしまうという話がありましたが、私たちが接するお母さんたちの中には、自己肯定感が低くて自信の無い人もいます。褒められた経験が無いんですね。たまたまうちの職員が褒めたら、すごく喜んだと。子どものころにそういう経験が全くない人が親になっても、子どもを褒めることができない。こういうことが再生につながっていくのかと思うと、調理の中で褒められるとか、そういう経験ができる場になるのはいいだろうなとお話を聴いていて思いました。
（事務局）　我々も、もう少し主としての子ども食堂をどのようにやっていくのか、共通認識のようなものについて、まとめたいと思いましたので、別途メール等でご意見を伺えたらと思います。
では、続きまして、児童養護施設退所者の現況調査について、ひとり親家庭の支援事業についてになります。
まずは、児童養護施設等の退所者等の現況調査について、ご意見等をいただきたいと思います。
（松橋委員）特に異存はないです。私たちの現場からすれば、調査に答えてくれる子どもたちは、ある程度生活ができている子、あるいは児童養護施設がかかわって、その状況を知っている子どもたちで、協力についてはほぼ大丈夫です。しかし、行方不明などの子どもたちについては把握することが難しいです。一番把握できる方法は、子どもたち同士です。来園した子どもたちに聞いたところ、スマホ関係のソーシャルネットワークなどで子どもたちのほうがずっと情報がつながっていることがよくわかってきました。そういうところから状況がわかるようになっていくと思います。生活状況のわからなくなっている子どもたちこそが一番課題を抱えていると思います。そこをどう見つけて、どうやっていくかが課題です。いろいろなアフターケアの制度できていますし、また施設もアフターケアをやっていますが、そういうところを使ってくれる子どもたちはいいです。でも、そこに行かない子どもたちもいます。例えば、警察から連絡が入り、以前そちらにいましたかと問い合わせがあったり、あるいは倒れていて病院に運ばれて、親がわからず、本人が水上学園にいたと言っているのでということで連絡があるなどです。
うちの職員で、40年近く働いているベテランの職員が、「究極のアフターケアはインケア」だと言っていることを非常に印象深く思っています。児童養護施設にいる間に、きちっとやっていれば、アフターケアもちゃんとつながっていきますし、むしろアフターケアが必要ないくらいに育て上げればいいということだと思います。
例えば、児童養護施設の子どもたちは、以前は公立の高校しか行くことができませんで

した。しかし横浜市の場合は、20数年前に、横浜市が就学援助という制度で私立の高校、いわゆるサポート校といわれる通信制を使って行われている高校に行けるように補助をしてくださるようになりました。中学を卒業して就職し、15の春に働かないといけない、それも住み込みで、という子どもたちが施設に残り、高校に行き、高校を出ることで自信がつき、就職先も広がるということができるようになりました。非常に感謝しています。中学生は塾にいくことができるようになりましたし、水上学園では有料の先生に来ていただき英会話教室をやることもできるようになりました。このようなことができるようになり、児童養護施設にいるとある意味で豊かにやっていけるのではないかと思います。その子どもたちがお家に帰ると、大変な状況に戻る子どもたちを何人も見てきました。親と暮らすことは当然いいことでもありますが、その辺の大変さを感じています。私たちの施設では、自立支援の目標として、経済的自立と精神的自立をかかげています。経済的自立とは、税金を払える大人になって、自立できる子どもたちのことです。精神的自立は、自分の自己肯定感とか、自分は生まれてきてよかった、生きていていいんだ、大人になったらこうなっていきたい、というような思いをつくっていくことが大事だと職員と確認しています。

先ほどの子ども食堂の話もありましたように、食事というのはすごく大事だと思います。食事をすることで子どもたちが集まってくることも興味あることと思っていますが、そこに来た子どもたちとのかかわりが大切だとおっしゃったことがとても大事なことだと改めて思いました。別のところで、寄り添い型の学習支援の話し合いに行ったときにも、やはり学習支援も大事だけれど、そこで子どもたちがモデルになるいい大人と出会うことによって子どもたちが変わっていくことが大事であると話されていました。「自分は大丈夫なんだ、こういうふうにやったらやっていけるんだ」というような思いを子どもたちに伝えていくことが大事なことであり、これが連鎖を防ぐための大切なことだと最近感じています。

（濱田委員）横浜市には、そんなに児童養護施設はないと思いますが、その中だけで限られた数を拾っていくということでしょうか。

私どもは、知的の障害や精神の障害をお持ちのグループホームをたくさん法人が運営している都合上、措置変更で、家庭に戻せない神奈川県域の児童養護施設でお預かりをしていた、18歳になって迎えて、軽い障害をお持ちの方に手帳を取らせて、私どものグループホームにお預けをする、虐待のケースがほとんどです。子どもは望まないところで虐待を受け、措置され、児童養護施設に望んで行く子はいないと思いますので、その辺の温かい調査をしていただけたら、ありがたいです。よい未来を一緒に切り開いてやりたいという思いは、どの方たちも一生懸命、この子のためにと思って、将来を一緒に見守りたいという思いが途切れることのない調査結果になったらうれしいと思います。

（事務局）　この現況調査は、今後進めていく中で、どこまで取り組めるかなどあると思いますが、行方が不明の方への調査方法は、子ども同士のつながりのようなもので、ある程度把握できるのではないかというご意見もありましたので、その辺を踏まえていければと思います。

（事務局）　アンケートに答えてこない子のお話は、我々も痛感しています。子ども同士のネ

ットワークは我々も認識しており、施設の違う子ども同士のネットワークもあると聞いています。そういうものを活用していくために、施設同士のネットワークも必要かなと思いますので、そういったものも構築できるようなシステムを今後考えていかなければと思っています。

また、今回の調査の対象は、今回が初めてということもあり、横浜市で所管している児童養護施設といった施設を対象にしています。例えば、児童養護施設から障害児の施設に措置変更になるような方は、追跡できると思いますが、今回の調査の中ではできないところもあるかと思います。この調査は、今後も継続したいと考えていますので、その中で改善できるもの、広げていけるものは、考えていきたいと思います。また、神奈川県域の施設に入っている子どもが多くいるということもありますので、神奈川県の施設などとの連携等も含めやっていければと考えています。

（開地委員）児童養護施設にこの４月から仕事をしていますが、対象者に関してはアフターケアの担当者もいて、追いかけていますが、中々つながらない、施設にも来ない子どもたちがいるというところでは、そういう子どもたちを把握していくこと、どう把握していくかが大事だと思っています。私が来た４月以降で、昨年度、いわゆる家庭引き取りではなく、就職で自立してひとりで暮らしている方が６人くらいいるようですが、お二方はもうお仕事をやめている。お一人はいろいろ紹介しましたが結局もうつながらない、完全にこちらのかかわりをシャットアウトしている。お一方は、いろいろフォローして、家族の支援を受けながら、次のことを考えようとやっていますが、そういう形で就職後のアフターケアについては、それ以降の非常に厳しい道があると思います。夏休み後学校が始まるというところで、特に進路については中３生は高校をどうするか、高３生でいえば就職、ごく少ないですが進学という選択肢を持つ子どもたちもいるなかで、今からどうしていくかがすごく大事だと思います。

子どもが自分のことを考えていく中で、食に対する子どもたちの考え方がこれからの生活に大事だと思います。大きい子になると、学園の食事を食べなかったり、お弁当も余り食べずに持ち帰って捨ててしまったりということがあります。今後自分が自立したときに、食の大切さを理解するためには、施設で過ごすということもありますが、それ以前のそれぞれのお子さんが支援を要する環境にあった中で、例えば小さいときからそのような地域の取組があれば、またそれを受けた大人や、仲間とのかかわりのところで、そういうものがつながっていくのではないかと思います。また、進学を考える上でも学習がすごく遅れていることは、その子の能力も一部影響があるかもしれませんが、学習に対するアレルギーがあると思います。例えば地域で支援を受けながら、施設に入っても、またそういう取組をしていくようなところで、その子が頑張るとこれだけでできるという意識が持てるかどうかが、大事だと思いますので、地域での取組がつながって、例えば施設に入っても、それを受けて子どもたちを対応していけるといったことができるといいなと考えていました。

（川尻委員）子ども食堂について、児童相談所の立場から、子どもの貧困は、ネグレクトと密接な連携があると思っています。ネグレクトは、虐待種別の一つですが、単に食事を与えないだけでなく、子どもの健全な発達に必要なものが与えられないこと

がネグレクトかなと思います。子どもが健全に成長していくために必要な人や地域とのつながりが奪われていることもネグレクトかなと感じます。子ども食堂が、食のような一つのきっかけから始まって、子どもたちが今まで地域や、より多くの大人とつながる機会を奪われていたとしたら、この子ども食堂が、親ひとりが子どもを育てるという時代ではないということが広く認識されているのかなと思いますが、地域もしくは多くの大人が子どもたちを一緒に育てていく場になっていけばいいと思いました。

（高岩委員）今日、改めてこの計画の概要を説明していただいて、この子どもの貧困に関する取組の基盤として、「子どもの豊かな成長を支える教育、保育の推進」と書いてあって、私は改めて現場にいる者として、職員と一緒に、連携機関とも連携しながら頑張っていきたいなと、また心新たに思いました。

現場にいる者として、生活が苦しいお家のお子さんって、お家で温かい言葉をかけてもらうとか、そこが苦しい。お家の方が余裕がなくて、苦しい場面があって、生活の困窮が心の貧困につながっていくおそれを現場では感じています。子どもはひとりでは生きていけませんから、お家の方、家庭の支援、そこが難しくても、そこを支える地域の人とのつながりを大事にしなければと特に感じました。保育園でやれることをこれからも皆様と考えながらやっていきたいと思いました。

（小園委員）調査で、私どもは新しい事業を始めるときに必ず調査を数年に一度やります。昨年は非正規職で働くシングル女性への調査をしました。全部自前でウェブアンケートをやりました。調査は、届ける先の人がそれをやることで自分たちの生活がよくなる、困り事を聞いてもらえる、見守られているという、メッセージを受け取ってくれるかで、回答率変わると思います。ぜひ文言にしても、入り方にしても、「何か困っていることはないですか」とか、難しい言い方でなく、漢字はなるべく少なくして、ツールのこととか。子ども同士がＳＮＳで近況を伝え合っているなら、手から手へこれを伝えてほしい、皆さんのためになる、役に立ちたいというメッセージとか、やり方を工夫してやってもらって。

非正規の人たちの調査は、アンケートの次にグループインタビューをやりました。同じ立場で困っている人たちと会いたいと言ってくれて、６人ずつを２回横浜でやりました。とても有意義な場になって、その後も助け合いの会が生まれたり、当事者としての出会いとか、力づけをお互いにし合うといったことがあって。自分たちがこれで助かる、よくなるという形で進められるといいなと、できることがあればお手伝いをしたいと思います。

あとは、調査すると、住宅の問題ですとか、シングルの人たちも多いと思うので、家賃の問題、住むところで困っている人もすごく多かったです。

男女センターでは自助グループ支援をずっとやっていまして、育ちの中でいろいろな問題、困難があったとか、家庭がいろいろ複雑だったとか、親との関係で傷ついたとか、性被害に遭ったとか、いろいろなグループがありますが、こういった方たちがまた新しいグループを立ち上げるお手伝いなどもできますし、既存のいろいろなグループもぜひ資源として、つながっていけたらいいと思っています。

（村田委員）子ども食堂を流行で終わらせないため、例えば子ども食堂を提供する大人たちが

それを通じて、自分たちの活動や関係を広げたり、大人たちも楽しむことがあると、子どもたちもその中で、自分たちで活動を見つけ、広げていくことがあるかもしれないと思います。かかわる大人が、自分たちが地域の中で、もっといろいろな活動を広げるという視点を持ってできると、またとても楽しいのかなと思います。例えば、私がそういう参加ができたら、自分がとても楽しいのかなと思いました。

（事務局）子ども食堂は、共通認識をつくること、子ども食堂以外の子どもの居場所に、子どもに接する大人のかかわり方、人材育成も必要かなと意見を伺っていて感じました。

調査は心配している気持ちが伝わるようにということ、保育園、男女共同参画センター、といった資源同士のつながりの中で、こういった活動を進めていければというご意見がありました。

（湯澤委員）ひとり親について、日常生活支援事業が少し対象拡大というか、就業を理由とした定期利用の開始とか、こういう兆しはすごくありがたいと思いました。

ひとり親家庭の方の中でも、中卒の方や高校中退の方と大卒の方では、支援のあり方は相当違うところがあると思います。できれば、中卒や高校中退でひとり親になった方々が、どのように本当に安定的な暮らしがしていけるかというところで、支援のあり方を皆さんとご協議できればと思います。高等学校の卒業認定試験の事業も、ようやく国もそういう視野を持って、費用助成が始まったと思いますが、実態は、ひとりで勉強するのは難しく、実際にこれで合格につながることがどれくらいの比率で上がるのかは、厳しいのかなと。母子生活支援施設の中では、「ママ塾」ということで、お母さんに１対１でお勉強を教えるという取組もあります。在宅のシングルマザーの方も、ママ塾のようなことがあると、こういう事業も生きてくるのかなと思います。

閉　会

（事務局）時間になりましたので、本日はこれで分科会のほうを終了いたします。

本日いただいた意見を参考に、事務局でも整理させていただきます。なかなか回数も開けませんので、事務局にお電話、メールなどでご意見をいただければ幸いです。

最後に、事務局のほうから３点ご案内をさせていただきます。１つ目ですが、この会議や計画に関するご意見・ご質問は随時、こども青少年局企画調整課までご連絡いただきたいと思います。２つ目ですが、冒頭でご案内いたしましたとおり、本日の会議の記録につきましては、発言された方の氏名を含めて、後日ホームページ上で公開していく予定です。記録がまとまりましたら、委員の皆様にご確認いただいた上で対応いたしますので、よろしくお願いいたします。最後に、次回、第２回子どもの貧困対策に関する計画推進会議の開催につきましては、２月から３月の開催を予定しております。日程につきましては、もう少し近づきましたら、改めて事務局より調整をさせていただきます。

それでは、本日の横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議は、これをもちまして閉会とさせていただきます。長時間、熱心なご意見、ご議論ありがとうございました。

（閉会）
配布資料 ・　横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議　委員名簿 ・　横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議　事務局名簿 ・　横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議運営要綱 ・　横浜市子どもの貧困対策に関する計画の推進について ・　横浜市子どもの貧困対策に関する計画　概要 ・　子どもの学習支援・生活支援関連事業一覧 ・　子どもの貧困対策に資する地域等の主体的な取組に関する調査　実施結果（速報） ・　児童養護施設退所者現況調査について ・　平成28年度のひとり親家庭への支援事業について 別添資料 ・　横浜市子どもの貧困対策に関する計画